

ドイツにおける日本語教育の現状と課題

川 口 義 一
細 川 英 雄
吉 岡 英 幸

キーワード

ドイツにおける日本語教育 大学における日本語教育
ギムナジウムにおける日本語教育 市民大学における日本語教育

0. ワークショップ「日本語教育の現状と課題」

早稲田大学日本語研究教育センター（以下、本センターと略す）は、2000年2月24日～26日の間、ドイツ連邦共和国ボン市にある「早稲田大学ヨーロッパセンター」との共催により「日本語教育の現状と課題」と題するワークショップを行い、ドイツにおける日本語教育関係者、延べ22名と意見・情報を交換する機会を持った。これは、昨年度開設10周年を迎えた本センターが、学内の日本語教育における教育内容の一層の充実を目指す一方で、広く世界の日本語教育にも目を向け、教育・研究の成果を海外にも発信していくという姿勢を具体化する行動の一貫として行ったワークショップであったが、さいわい現地での広報活動や会場選定などでボンの本学ヨーロッパセンターの共催が得られたため、準備期間が短期であったにもかかわらず、所期の成果を収めることができたものである。本稿は、このワークショップに出席した本センター専任教員3名を筆者グループとして、その内容を報告するとともに、本センターの海外日本語教育支援の方向と可能性を探ろうとするものである。

今回、海外の日本語教育関係者との直接の意見・情報交換の機会をドイツに求めたのは、同国が日本語教育関係者の組織化において極めて優れた成果を挙げているからである。ドイツの日本語教育は、機関別に、大学を中心とする高

等教育機関で行われているもの、公営の市民大学 (Volkshochschule) を中心とする一般成人教育機関で行われているもの、およびギムナジウム (Gymnasium) を中心とする中等教育機関で行われているものがあるが、このすべての分野で教師間の交流・親睦・相互研修などを推進する団体が存在し、定期的に教師会・学術発表会・研修会などの活動を行っている。特に、市民大学とギムナジウムの教師会は組織率が高く、それぞれ独自に研修会を主催するほか、相互交流も始めるなど、積極的に情報交換をしようとしており、ドイツ国内の日本語教育の現状を知るにも情報が分散せずに収集できるという利点がある。一国内の異なる日本語教育の関係者が、機関別にこれほど組織化されているところは、カナダを除いて⁽¹⁾ 世界でも珍しいことと言ってよい。日本語学習者数では世界一を誇る韓国でも、教師の組織化は最近始まったばかり⁽²⁾ であることを思うと、ドイツの現状は特筆に値すると思われる。

ワークショップは、三日間をかけて機関別に行われたが、各回とも、①まず本センターからの参加者が今回のワークショップの趣旨説明、本センターの組織・業務と日本語授業の特徴、別科学生の公募再開、日本語教育学の独立大学院開設の構想、参加者の参考になりそうな他の国の日本語教育事情などを説明し、②続いて参加者の代表が各機関全体の日本語教育の現状と課題を概説したあと、参加者個々の抱える問題を報告しあい、③最後に本センターがそれぞれの機関の現況に対してどのような関わりができるかについて意見交換を行った。以下、高等教育機関、一般成人教育機関、中等教育機関の順でワークショップの②③の部分を中心に議論に内容を報告する。

1. 高等教育機関における日本語教育

高等教育機関の日本語教育関係者の集まりは、ワークショップの二日目に行われた。参加予定者13名中、12名の出席⁽³⁾ を得た。まず、大学全体の現状についてボン大学東洋語学講座 (Seminar für Orientalische Sprachen, Universität Bonn) のカイ・ゲーネンツ (Kay Genenz) 教授より説明があったが、大学は他の機関と異なり日本語教育の担当者だけの教師会は存在しないため、全国規模の現状把握はむずかしく、ゲーネンツ教授の報告もボン大学のあるノルトライン・ヴェストファーレン (Nordrhein-Westfalen: N R W) 州の現況が中心と

なった。

その後、続いて出席者の勤務する各大学の現状と課題が報告されたが、日本学 (Japanologie) の講座を持ち、専門研究のための日本語科目を持つ大学と選択科目としての日本語科目を持つ大学 (同じ大学内でも必修科目と選択科目に別れる場合もあるが) とで問題が大きく異なるほか、大学個々にも異なる問題が存在することが判明した。興味深いのはハンブルグ大学 (Universität Hamburg) からの報告で、東洋学部の学生が日系企業に就職することが多くなって来たため、従来型の教育 (読解力伸長を目標においたものが多い) では会話力が伸ばせず、かといって物価高の日本に留学させれば費用の問題を解決できないというものであった。一方、はじめからビジネスマンとして恥ずかしくない日本語力の習得を目標において、日本での留学と企業研修を課しているWHU (Wissenschaftliche Hochschule für Unternehmensführung Koblenz: ドイツでは珍しい経営学系の私立大学) のような機関もあり、従来日本学研究者養成中心であったドイツの高等教育機関における日本語教育が、日本語学習者のニーズの変化に対応して変わっていきつつあるのが見て取れる。また、ベルリン自由大学 (Freiuniversität Berlin) からは、地域の高校の外国語教師を日本語教師として養成する課程が構想され具体化しつつあるが、教員養成の実力があり、教授法やカリキュラムに関するリテラシーのある教員がドイツにどれだけいるかは問題であると、新しい状況に対応を迫られる高等教育機関の挑戦と苦悩が報告された。

なお、必修科目と選択科目の日本語教育のカリキュラムの相違、教育上の問題点などについては、トリアー大学 (Universität Trier) から詳細な報告レジュメが提出されたので、読者の参考に供するため、コピーをそのまま稿末に掲載する。

このように、機関別に問題の異なる高等教育機関では本センターに対して全体として要望や意見が述べられるわけではなかったが、個別機関からは次のような発言が聞かれた。例えば、アウグスブルク大学 (Universität Augsburg) ではミュンヘン大学 (Ludwig-Maximilians-Universität München) ・パッサウ (Universität Passau) 大学と共同で、合同で開発した日本語教材の改訂を企画しており、そのようなプロジェクトに対し本センターとの共同研究を組むこと

を望んでいるという。また、ベルリン自由大学からは、OPI や PDL⁽⁴⁾ のような新しいテクニックを含む教授法の実践研究をするために、本センターのように常時安定した数の学習者がいる機関が「実験クラス」を提供してくれると助かるという意見が出た。また、このグループ唯一の非大学機関である、NRW州立外国語学校 (Landesspracheninstitut NRW Bochum)⁽⁵⁾からは、日本語教育者として専門の訓練を受け、かつドイツ語会話能力のある若い講師の派遣を望むという要望が出された。

2. 一般成人教育機関における日本語教育

一般成人教育機関の日本語教育関係者の集まりは、参加予定者7名全員の出席⁽⁶⁾を得、ワークショップの最初の日に行われた。会場は、他の二日間がボン大学の施設を利用したのに対し、この日はデュッセルドルフ市民大学 (VHS Düsseldorf) の教室が使われた。まず、池田良一「ドイツVHS日本語講師の会 (Verein zur Förderung des Japanisch-Unterrichts an VHS e. V.)」(以下、「講師の会」と略称) 会長から、「VHS」という組織自体、およびその日本語教育の現状と問題点についての説明があった。

日本語では「市民大学」と翻訳されている「VHS (Volkshochschule)」は、ドイツ全州の各都市に存在する公営の成人教育機関で、中等教育の学生から年金生活者にいたる多様な受講者を対象に、教養・実用の両方面にわたる講座を開設している「公営カルチャーセンター」である。現状における問題点は、①授業施設及び教材、②授業の進度、③受講生の多様性、④コースの成立・継続、⑤講師の教授能力の5点に要約される。①については、まず教室問題と教材問題が密接に関連している。というのは、大都市のVHSには専用教室があるが、中小都市の現状ではギムナジウムの校舎に間借りすることが多く、教材も講師がそのつど持ち運ばなければならないということである。このため、市販の豊富な視聴覚教材を駆使できないという悩みがある。②については、年間授業時数60時間 (90分/週×30週/年) 程度という時間的制約がある上に社会人中心で宿題が出しにくいいため、進度が上がらないということ、③については、年齢も学習動機もさまざまな学習者のどこに照準を合わせるかということが、それぞれ問題になる。④については、受講者が一定人数に達しないとコースが成立

しないという事情があり、最低参加者確保の対策に四苦八苦するという現状が報告された。⑤については、当該地方在住の日本人に教育を任せるしかない現状では、日本語教育未経験者が講師になってしまうことが多く、現役講師の研修をどうするかという問題がある。

この現状を踏まえて、①インフラの整備、②講師の教授能力の向上の2点が、今後の課題として示された。①については、コースのニーズに合った教科書・教材の開発を目指す「講師の会」の「教科書作成プロジェクト」および、開講のための「最低人数制」の弊害を除くための方策として検討されている「最低人数スライド制受講料」⁽⁷⁾ 導入への州政府への働きかけのなどが報告された。②については、「講師の会」会員（全国68名）⁽⁸⁾ に対して、VHS州連盟の外国語教授法研修コースの利用を勧めるほか、地域ごとの勉強会と1年に1度の定例研修会（国際交流金の「ケルン文化会館」との共催）を、「講師の会」発足1年前の1992年以来、続けている⁽⁹⁾。

以上の概説を受けて、ニュールンベルク市民大学V（VHS Nürnberg）、ゾースト／リップシュタット市民大学（VHS Soest/Lippstadt）、ミュンスター市民大学（VHS Münster）およびシュトゥーテンゼー市民大学（VHS Stutensee）の担当講師から、それぞれの教育現場の現状について報告があったが、おおむね池田会長の話の内容の具体例というところであったので、内容は興味深かったが、いちいちの話の紹介は省略する。ただ、シュトゥーテンゼー市民大学からの「日本語村祭り」についての報告は、地方VHSの集合体のプログラムとして特筆に値するので、簡単に紹介しておく。これは、1998・1999両年にバーデン・ヴェルテンベルク（Baden-Württemberg）州のVHSと国立大学が共同して行った、日本語集中講座と日本文化体験イベント（ラジオ体操・書道・料理教室・盆踊り）の複合プログラムである⁽¹⁰⁾ が、参加者の好評を得て継続して行われる予定である。このような催し物の成功がVHS日本語講座の継続を促す力ともなるので、「講師の会」としてはぜひ全国規模の定例講座にしたいという抱負も語られた。

「日本語講師の会」の早稲田大学に対する要望としては、まず定例研修会に対する講師派遣が挙げられる。もちろん、派遣にかかる費用を早稲田側に負担してもらおうという形を望んでいるわけだが、毎年ということであれば、本学

国際交流センターの学術交流の講師派遣の対象になり、予算的措置も可能ではないかと考えられる。また、前述の「日本語村祭り」のような行事に、早稲田大学の学生が参加すること（こちらは学生の自己負担）を促してほしいという要望もあった。特に、大学院で日本語教育学を専攻しているような人々が日本語ネイティブの参加者として加わってくれば心強いということで、日本語教育学の大学院開設に対する期待は高いものがあると思われる。

なお、このワークショップの日の夜、21時20分から、「講師の会」の計らいでVHSの日本語授業を見学することができた。講師は博士号を持つ若いドイツ人女性（「ザイトウ (Saito)」という名前から配偶者が日本人であろうと推察される）で、学生は6名（大学生・技術者・会社員などで、20～30代か）だったが、解説の方法・練習のさせ方・誤りの訂正法などを見ると、この講師がなかなかよい素質を持っていることが分かった。どこかでもう少し教授法を勉強し、日本語をブラッシュアップすれば、相当よい教師になれると判断される。このような、非日本語母語話者教師に、本センターの海外日本語教育支援の一つとして、短期間の研修の機会を設けることなどが検討されてもよい。

3. 中等教育機関における日本語教育

ワークショップの最後の日には、中等教育機関の日本語教育関係者に集まってもらった。参加予定者6名のうち3名の出席⁽¹⁾は少々残念だったが、ギムナジウム日本語教師の全国組織たる、「ドイツ語圏中等教育日本語教師会(Verein der Japanischlehrkräfte an weiterführenden Schulen im deutschsprachigen Raum e. V.)」(以下、「VJS」と略称)の会長、持田節子氏(本学教育学部OB)と事務局長の小泉＝リーベルト・清子氏の出席が得られたため、実質的な討議が可能であった。

まずは、小泉＝リーベルト氏からドイツの中等教育における日本語教育事情について、概説的な報告があった。それによれば、ギムナジウムを中心とするドイツの中等教育機関における本格的日本語教育は、1982年にラインラント・プファルツRheinland-Pfalz)州のヴァイヤーホフ・ギムナジウム(Gymnasium Weierhof)で日本語が正規の外国語授業となったことに始まる。「ギムナジウム」とは、4年制の小学校課程修了後、5年生から13年生(年齢で12～20歳)

までの、高等教育機関進学を目指す学生の通う学校であるが、現在日本語科目を設置しているギムナジウムはおよそ50校、8年生以上で始める日本語科目の学習者はドイツ全体で約1600名であり、この数は過去3年間ほぼ一定しているとのことである。ドイツは教育における地方自治が徹底しているので、カリキュラム・教育目標は州ごとに作成・決定され、全国统一カリキュラムは存在しない。教師は、フルタイムの専任教諭職のほか、フルタイムの1/2、3/4などの時間制限講師や1コマごとの時間講師などさまざまな雇用形態がある。担当科目も、日本語専門があるほか、フランス語など他の外国語や体育・数学など他の学科科目の担当と兼務ということも少なくない。ただ、共通しているのは、未成年の学習者を引き付ける教師としての技量と教育関係の法規・規定についての知識があることである。したがって、外国人講師の場合、高度のドイツ語力を要求される。

ギムナジウムにおける日本語教育の問題点は、①「アビトゥア (Abitur)」科目になること、②生徒数の確保、③資格ある教師の養成の3点である。①の「アビトゥア」というのは、中等教育課程卒業と高等教育機関入学資格を証明する試験であるが、日本語がドイツの中等教育界で一人前の科目と考えられるようになるには、この「アビトゥア」科目になることが必須なのである。さいわいVJSの会長の持田氏や他の同会会員の努力のおかげで、1999年5月に全国レベルで日本語が「アビトゥア」科目に認可されたが、なお各州ごとにカリキュラム作成をして州文部省の認可を得なければならず、そこから全国统一試験基準のプランを作成するまで、まだ時間がかかりそうである。②の問題は、どこの学校でも生徒数の減少はクラスの閉鎖につながり、教師の失職を意味するので、そのために有効な対策をどうたてるかということである。③は、教員養成、特に日本語力の低いドイツ人教師の日本語をどうブラッシュアップするかの問題が大きいということである。

「VJS」も、VHSの「講師の会」と同様、会員間の親睦・情報交換と教授技術の向上を目指して毎年研修会を開いている⁽¹²⁾が、第1回は1988年と「講師の会」より4年も早く始まっている。すでに10年を越す活動のおかげで、前述の問題点のうち①は会員相互の情報交換・共同作業などで相当程度前進し、②も受講者数の減少を食い止めるようなアイデアの紹介・交換が行われてきた。

機関別の現状紹介では、学生に魅力的な活動例として、デュッセルドルフのツェツィーリエン・ギムナジウム (Cecilien-Gymnasium Düsseldorf) の弁論大会の開催や選択必修日本語修了者に対するキープアップクラスの開設、ベルリンのヒルデガード・ヴェックシュナイダー・オーバーシューレ (Hildegard-Wegschneider-Oberschule) の日本の高校とのビデオ交換などが報告された。

③の問題については、ベルリンからの参加者が、ベルリン市教育省と国際交流基金の話し合いで教師養成プログラムが行われ、市内の大学での教授法講義受講 (週15時間) と日本語学習 (週8時間) のあと、北浦和にある「国際交流基金日本語国際センター」での研修機会が与えられる制度のあることを報告した。報告者の講師自身もこの制度に応募して日本に研修に行けたのだが、フランス語教師でもある彼から「日本語教師はもっと他の外国語の教授法を勉強して、日本語教育に応用すべきだ」と、正当かつ頼もしい発言があった。この報告者のように、教授法を自分で開発していけるような人にこそ、日本語力の維持・向上のために日本で研修を受ける機会を与えられないかというのが、研修会への講師派遣と並んで「V J S」の本センターに対する期待であった。

4. 今後の課題

以上、今回ドイツで行われたワークショップ、「日本語教育の現状と課題」の内容を要点のみにまとめて紹介⁽¹³⁾した。短い期間ではあったが、早稲田大学の日本語研究教育センターが世界の日本語教育支援に向けて意欲的な志を持っており、そのために積極的に情報を集めようとしているという姿勢は理解されたように思われる。その意欲に対してドイツ側から提示された期待・要望は、共同研究の提案であったり、研修会や教育現場への講師派遣の希望であったり、現職教師の訪日研修の機会供与であったりした。これらのすべてに、ドイツ側が理想とするような形で応えるには、本センターの現状では人員も予算も不足するであろうことは明らかであるが、現有勢力で対応できる部分が十分にあるということも確かである。今後は、今回のワークショップで得た情報をもとに、とりあえずドイツの日本語教育界とどのような協力関係が作り上げられるかを検討し、共同研究や人材交流の形で具体化し実績を積み上げていく必要がある。その実績とそれを生み出すまでに蓄積されたノウハウを利用すれ

ば、ヨーロッパおよび世界の他の地域の日本語教育界とも協力関係を築き上げ、世界の日本語教育の発展に貢献していけるものと確信する。

なお、今回のワークショップの開催に当たっては、招待する人々の人選、報告や質疑の内容の決定などに関して、ボン大学のゲーネンツ教授とWHUの持田教授から貴重な助言を得た。ゲーネンツ教授は本学とボン大学の交流の歴史を想い、持田教授は本学OBとしての誇りを感じて、ワークショップの成功に献身的とも言える支援を惜しまれなかった。ここに、特に記して、感謝の意を表すものである。

(注)

- (1) カナダには、1988年創設の「カナダ日本語教育振興会 (Canadian Association for Japanese Language Education 会長：野呂博子)」という全国規模の団体があり、高等・中等・初等教育、継承語教育、一般成人教育など異なる分野の教育関係者が組織化されている。年に一度、「現職者研修会」を催すほか、地区部会や対象者別部会（年少者部会・成人部会など）の学習会・ワークショップを随時行っている。
- (2) 韓国では、日本語教育関係者だけで組織されている団体で全国規模のものは「在韓日本語講師研究会」のみである。これは、もともと高等教育機関の日本人日本語教師のための、研修・情報交換組織であったが、1998年より、それまで「トヨイル会（「トヨイル」は韓国語読みの「土曜日」）」の名称で研究会を開いていた一般成人教育機関（韓国で「学院（ハグォン）」と呼ばれるもの）の講師団体が吸収されて、教授対象者の異なる全国日本語教育教師団体ができあがった。学習者の多い中等教育機関の教師団体は、まだ地方レベルの組織化に止まっている。
- (3) 出席者は以下のとおり：Prof. Dr. Kay Genenz (Seminar für Orientalische Sprachen, Universität Bonn); Dr. Taka Bluhme-Kojima (Universität Bielefeld); Dr. Shoji Iijima (Universität Heidelberg); Noriko Katsuki (Universität Trier); Dr. Yoko Koyama-Siebert (Universität Tübingen); Dr. Kazuma Matoba (Universität Witten-Herdecke); Setsuko Mochida (W H U); Keiko Oshima-Gerisch (Universität Augsburg); Prof. Dr. Jens Rickmeyer (Universität Bochum); Rudolf Schulte = Pelkum (Landesspracheninstitut NRW Bochum); Dr. Yoriko Yamada-Bochynek (Freiuniversität Berlin); Takeshi Yamamori (Universität Hamburg)
- (4) 「P D L」は“Psychodramaturgie Linguistique”の略称。この教授法についての詳細は、Dufeu, Bernard (1996) “Aspekte der Sprachpsychodramaturgie” (“Fremdsprachen Lehren und Lernen” vol. 25 pp. 144-159所載) 参照。
- (5) ノルトライン・ヴェストファーレン州が成人の生涯教育サービスの一環として始めた公営外国語学校。日本語・中国語・ロシア語・アラビア語の講座がある。日本語講

座主任のルドルフ・シュルテ＝ペルクム (Rudolf Schulte = Pelkum) 氏は、語学教育研究所時代の日本語別科修了生である。

- (6) 出席者は以下のとおり：Ryoichi Ikeda (VHS Ratingen); Toshiko Chikushi (VHS Nürnberg); Miho Miyagawa-Giraud (VHS Stutensee); Mami Pütter-Onoda (VHS Geseke); Dr. Undine Roos (VHS Düsseldorf); Yasuko Sawai (Japanisches Kulturinstitut Köln); Yoshiko Watanabe-Rögner (VHS Bochum)
- (7) 受講者が少ない場合は、人数に応じて一人分の受講料を上げる方式。
- (8) 女子64名，男子4名．非日本語母語話者6名。
- (9) 講師は主に日本から招いているが，これまでの講師に，水谷修・高見沢孟・石田敏子・大曾美恵子・土岐哲などの名前が見える。
- (10) 1998年の実施状況については，「講師の会」副会長である，宮川＝ジロー・三保氏の報告記事，「日本語村祭り―日本理解への試み」(『月刊日本語』98年10月号 pp. 99-101所載) に詳しい。
- (11) 出席者は以下のとおり：Kiyoko Liebelt-Koizumi (Cecilien-Gymnasium Düsseldorf); Dieter Kammerer (Hildegard-Wegschneider-Oberschule); Setsuko Mochida (WHU); Kyoko Kuroki (フランスからの特別参加者．本学文研OB)
- (12) VHSの「講師の会」と同様，講師は主に日本から招いているが，これまでの講師に，鎌田修・坂本正・平高史也・鬼木和子・斉木ゆかりなどの名前が見える．本稿の筆者の一人，川口も1989年と1998年に講師として招かれている。
- (13) 出席者の発言の詳細は，発言記録集として別途刊行の予定。

＜ 参 考 資 料 ＞

Universität Trier

Japanischausbildung

Katsuki

1

トリアー大学日本語教育

1. 集中日本語講座の構成と内容 — 必修科目

1) 日本語1 週8時間	日本語の述語、動詞の活用、形容詞の活用															
<table border="1" style="margin: auto; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="padding: 2px 5px;">語彙数</td> <td style="padding: 2px 5px;">約 900</td> <td colspan="2"></td> </tr> <tr> <td style="padding: 2px 5px;">漢字数</td> <td style="padding: 2px 5px;">読める漢字</td> <td style="padding: 2px 5px;">約 340</td> <td style="padding: 2px 5px;">340 (200 200)</td> </tr> <tr> <td></td> <td style="padding: 2px 5px;">書ける漢字</td> <td style="padding: 2px 5px;">約 200</td> <td style="padding: 2px 5px;">200 (150 150)</td> </tr> </table>		語彙数	約 900			漢字数	読める漢字	約 340	340 (200 200)		書ける漢字	約 200	200 (150 150)			
語彙数	約 900															
漢字数	読める漢字	約 340	340 (200 200)													
	書ける漢字	約 200	200 (150 150)													
2) 日本語2 週8時間	<p>日本語1で学んだ文法を基礎にした文型 モダリティー表現 ～てください、～なさい、～なければならない、 ～なくてもいい、～てはいけない、～ましょう ～たほうがいい、～ないほうがいい</p> <p>時の表現 ～前(に)～後(で)、～間(に)、～たまま、 ～ながら</p> <p>間接・直接話法(～と言う) 比較の表現・最上級 存在文(ある/いる) 願望表現(～たい、～たがる、欲しい) 好き・嫌い表現 形状動詞(分かる、できる、要る、ある、いる) 形容動詞述語文(上手、下手、得意、苦手だ) 文の体言化(形式名詞「こと」) 所有文(～は～がある、いる、おおい、すくない) 頻度表現(～ことがある/ない/おおい/すく ない) 経験表現(～たことがある/ない) 受動文 使役文</p>															
<table border="1" style="margin: auto; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="padding: 2px 5px;">語彙数</td> <td style="padding: 2px 5px;">約 900</td> <td style="padding: 2px 5px;">1800</td> <td colspan="2"></td> </tr> <tr> <td style="padding: 2px 5px;">新出漢字数</td> <td style="padding: 2px 5px;">読める漢字 280</td> <td style="padding: 2px 5px;">620</td> <td style="padding: 2px 5px;">(200</td> <td style="padding: 2px 5px;">400)</td> </tr> <tr> <td></td> <td style="padding: 2px 5px;">書ける漢字 200</td> <td style="padding: 2px 5px;">400</td> <td style="padding: 2px 5px;">(150</td> <td style="padding: 2px 5px;">300)</td> </tr> </table>		語彙数	約 900	1800			新出漢字数	読める漢字 280	620	(200	400)		書ける漢字 200	400	(150	300)
語彙数	約 900	1800														
新出漢字数	読める漢字 280	620	(200	400)												
	書ける漢字 200	400	(150	300)												

3) 日本語3 週8時間

やりもらい表現
 意思表現 (つもりだ、～う／ようと思う)
 推量表現 (主観的推量)
 可能・自発動詞 (れる／られる)
 複合動詞 (～ている／ある／みる／しまう
 ／おく／くる／いく)

副詞
 擬態語・擬音語
 条件文
 連体修飾

語彙数	約 830	2630		
新出漢字数	210			
	読める漢字	約 210	840 (150	550)
	書ける漢字	約 150	550 (100	400)

4) 日本語4 週6時間

形式名詞 (ところ／ため／ほど／とおり／はず
 ／わけ)
 比況・推定表現 (ようだ／そうだ／らしい)
 感覚表現 (聴覚、味覚、視覚、触覚、痛み)
 待遇表現

語彙数	約 410	3040		
新出漢字数	40			
	読める漢字	約 40	880 (40	590)
	書ける漢字	約 40	590 (30	430)

5) 日本語講読入門 週2時間

新聞・雑誌・本から抜粋したテキストを読む。
 文の形態論・統語論・意味論的分析とドイツ語訳。
 1学期間に合計13のテキスト(各1頁の量)を分析・翻訳する。
 主なテーマは、政治・経済・文化。

6) 文語 週2時間

古文法の基礎を習得させる。
 教材は各担当教官が決める。

2. 選択科目としての語学講座

2.1 基礎課程 (Grundstudium)

日本語会話

翻訳 (D-J)

文字練習 (漢字が主)

2.2 専門課程 (Hauptstudium)

語彙練習

講読

作文練習

会話

文語講読 (文語文の文法分析)

その他、テーマを絞ったの演習

日本語動詞

擬態語・擬音語

形式名詞

動詞と格

助詞

語彙論

その他

3. 教官

二人 (下羽/香月)。一人はミクロ的アプローチ (香月)、他の一人はマクロ的アプローチ (下羽) で日本語教授。

4. 現在抱えている問題点

- 1) 中級・上級講座がまだ確立していない。
- 2) 日本人学生の受講が増えてきており、ドイツ人学生にも日本人学生にも満足のゆく授業形態がまだ確立していない。
- 3) 日本語初級 (日本語 1 から 4) 履修後、および 1 年間日本留学後、引き続き日本語を学習する時間的余裕が学生にない。また、学科として中・上級向け語学コースを開いても必修でないため受講者も限定されている。結果的には、多くの学生は、卒業時点で最初の二年もしくは三年間で学んだ日本語の半分近くを忘れてしまい、実質的には日本語を職業に生かすこともできず、中途半端な形で終わっている。
- 4) 教官の待遇問題 (研究費用が一切出ない。)